

<巻頭言>

## 人生の会計学～キャッシュ・フロー人生

研究科長 松井 泰則

創立20周年記念号に研究科長からも一言と課題を頂戴した。50年余り簿記・会計学の研究・教育にかかわってきた（専門馬鹿の）私が常に肝に銘じていることを今後に活躍が期待される院生諸君に熱くお伝えできればと思う。

人生においてお金はあるに越したことはない。平穏な生活も、その背景に堅実な家計経済があつてこそ。「お金なんて」という人は本当にお金に窮した人の気持ちも理解できず品格ある態度も持ち合わせていない。また貧困は社会からの孤立をも招く。お金とは…。

偉大な人の伝記は余多あるが、一面的なものも実際少なくない。そのような時、その人を知るためには「どんな賞や勲章をもらったのか」とか「どれだけの蓄財をしたか」ではなく、「どのようなお金の使い方をしたのか（キャッシュ・フロー）」をたどることでその人のことがよくわかる。なぜならキャッシュ・フローは事実としての行動記録だからだ。

業績は損益計算書によって、他方、現実のお金の動きはキャッシュ・フロー計算書で可視化される。後者は企業の過去・現在の経営行動から将来を予想する効果的な分析ツールである。お金は手段だと知りつつも、目的化することで迷い道に入り込む。そもそもお金は自己欲求の充足のために使うものである。経営や人生の将来ビジョンはそこから形成される。経営では「財務バランス」、人生では「相応」を踏まえ、そこに戦略（強みを生かした）投資が実践され発展的成長が生まれる。両者における成績評価の違いは、経営では結果としてどれだけお金を増やしたか、人の場合はどれだけ満足感を達成できたかにある。現在のお金の使い道はまさに将来を左右する。

「いつ、何に、どれだけお金を使うか」。小林虎三郎が英断した『米百俵』などは好例のひとつだ。「地獄の沙汰も金次第」という人もいるが、死を目前にして価値観は一変するようだ。さてさて、「幸齢期」を迎えるためには…。

「キャッシュ・フロー経営」。それは「どうしたらもっと稼げるか」ではなく、「顧客のさらなる笑顔のために自社は何ができるか（選択）・何をすべきか（集中）」という不断の心構え・原点に立ち返ることにある。ビジネスではお金は後からついてくる。

他方、「キャッシュ・フロー人生」。それは「どれくらいの財を成したか」ではなく、「これまで、どんなお金の使い方をしたのか」で自分の行動を可視化し振り返ることにある。お金がないとお米もパンも買えない。しかしそれでも他人からの信頼や感謝はお金よりも価値があると信じたい。

真のプロフェッショナルは、経営にも人生にもその信念にブレはない。

最後にキャッシュ・フロー観点からのアドバイスをひとつ。

経営そして人生に対して、ある将来時点から現在を見つめ直すバックキャストィングを試みてほしい。これから何にお金を使うかを逆に将来視点から考えるのである。

今後のお金の使い道（経営方針）は、その人の生き方（経営行動）に直結してくる。